

第12回

高齢化とSDGs — 「課題先進国として」

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学准教授 野田真里

世界に先んじて高齢化が進む行方市と日本とSDGs

前回の連載はZ世代の若者がテーマでしたので、今回は高齢者に焦点を当ててみましょう。行方市SDGs推進アドバイザーの業務として、行方市の政策全般にご助言をさせていただいておりますが、他の多くの日本の自治体と同様、少子高齢化や過疎化は大きなテーマとなっています。高齢化は私たちに身近なローカルな問題であると同時に、世界全体のグローバルな問題です。市のデータ（2021年7月の茨城県常住人口調査）によれば、高齢者人口割合は37・1%となっています。ご参考までに、茨城県全体としては本年初めて30%を超えて、30・4%となりました。一般に、65歳以上の人口が、全人口に対して7%を超えると高齢化社会、14%を超えると高齢社会、21%を超えると超高齢社会と呼ばれますので、日本は超高齢社会の世界の最先端にあ

ります。日本は世界に先んじて高齢化問題に直面し、これに取り組む「課題先進国」といえるでしょう。

日本の超高齢社会・高齢者が映す世界とZ世代の未来

こうした日本の高齢化の姿は世界の未来を映しています。2015年に世界の高齢化率は8・2%（先進国17・6%、開発途上国6・3%）となり、すでに7%を超えて高齢化社会に入っています。2015年は、ご案内の通りSDGsを含む「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が国連で採択された年です。さらに、2060年（推計）には世界全体の高齢化率17・8%となり、現在の先進国と変わらない水準となります。高齢社会を超えて、超高齢社会に迫る勢いです。ちなみに、同年の先進国の高齢化率は28・2%。つまり現在の日本とほぼ同水準です。他方、同年の途上

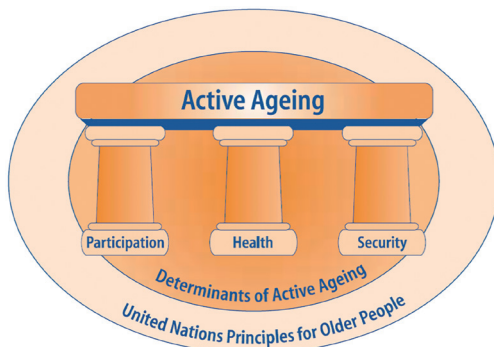
国の高齢化率は16・4%で、これは1995年の日本とほぼ同水準、つまりZ世代が生まれ始めた時になります。Z世代の大学生は先ほどお示しした2060年には57〜61歳と、高齢者の入り口に立ちます。つまり日本の高齢者はZ世代の若者の未来も映しているといえるのです。

SDGsと「活力ある高齢化」(アクティブ・エイジング)

SDGsを含む「2030アジェンダ」には「脆弱な人々は能力強化がされなければならない。新アジェンダに反映されている脆弱な人々とは、子供、若者、障害者（その内80%以上が貧困下にある）、HIV/エイズと共に生きる人々、高齢者、先住民、難民、国内避難民、移民を含む」（パラグラフ23）とあります。高齢者もこの中に含まれており、今日的には新型コロナウイルスと共に生きる人々も該当するでしょう。つまり、高齢者を大切にしつつ、元気で長生きしていただき、世界のそしてZ世代の若者の未来のために、まだまだご活躍いただきたい、ということだと思えます。そのキーワードとして世界保健機関（WHO

）が提唱する「活力ある高齢化」(active aging) が挙げられるでしょう。WHO（2002）によれば「アクティブ・エイジングとは、人々が歳を重ねても生活の質が向上するように、健康、参加、安全の機会を最適化するプロセスである」と定義されています（図）。高齢者の皆さまと共に「課題先進国」日本の地域社会から、全世代で元気にSDGsに取り組んでまいります。

図：活力ある高齢化の3本柱（参加・健康・安全）



出典：WHO (2002) p.45

【問い合わせ】  
政策秘書課（麻生庁舎）  
☎0299-72-0811  
Mail:seisaku01@city.namagata.lg.jp